

テイルズオブゼスティリア2

ふあみゆ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

導師スレイの旅から数ヶ月後

人々の適応力が高まったことにより天族はその存在が認知されるようになっていた。

そんな中北の大陸にて修行を積み帰ってきた青年、リーンは騎士試験を通りぬけハイランド王国の新人騎士となり、幼い頃生きる希望をくれた恩人であるアリーシャに再開する。

しかし、その頃王国では王位継承者たちの争いが起きており、その戦いに巻き込まれたアリーシャにも少しずつ変化が現れていた。

再び始まる穢れをめぐる戦いに若き騎士たちは何を思うのか…

目次

プロローグ

1

三人の騎士

4

プロローグ

「……………」

ハイランド王国のとある屋敷。何人もの兵士たちが屋敷の周りを囲んでいる。

そこにいるのは王国の王女の一人、アリーシャ・デイフダだ…

彼女は人質としてその屋敷に捉えられていた。

彼女の周りは敵ばかりだった…

低位とはいえ、王位継承権をそれでも確固たる自分の意志を持ち大臣たちと戦う自分は周りからは疎ましく思われていたから…

彼女はいつでもたった一人で国のために戦ってきた

「スレイ…」

彼女は閉じ込められた屋敷の中で自分のために戦ってくれているであろう、一人の少年のことを考えている。

自分のせいでのからの優しさが大臣たちに利用され、無理やり戦わされている少年のことを…

彼はアリーシャにとって数少ない味方の一人だった…

まだこの世界には彼のような人物がいる。それはアリーシャにとって大きな励みになっていた。

スレイは自分のことを見捨てない。でも、だからこそ心配もしていた。

自分のせいで、彼は大変な思いをしているんじゃないか…

なぜなら彼は、決して自分を見捨てないから…

「本当にそう思うのか？」

「!？」

突如響いた声に振り返る。しかしそこら誰もいない…

そして、その声は頭の中に再び声が響いてきた。

「彼は自分を見捨てない。これは自分の味方だ。本当にそうなのか？」

「誰だ！姿を現せ!!」

その声は彼女の不安を煽ってくる。

自分の見つけた。仲間という光をかき消されるような気がしてア
リーシヤのころから穢れが少しずつ顔を出し始める。

「だが、その男はローランス帝国へ向かったぞ。お前を見捨ててな…」
「な!?!」

そんな馬鹿な…

アリーシヤが信じられない、いや、信じることができない情報が、耳
に入ってきた。だが、その声には嘘だと疑うことのできない凄みがあ
る。

聞いた情報は事実なのだと本能が告げる

「嘘だ…うそだうそだ!!」

「ならば、実際に見せてやろう」

「あ、あああああつ!!」

そこで彼女の頭の中に流れ込んできた。スレイが戦場からどんな
ふうにごうどうしてきたのか。彼があのと何をしてきたのか、その
全てが…

「そんな、私は…スレイ…」

「そうだ。その男にはお前の事などもはや考えてもいない。お前の事
を仲間だなんて思っていないんだ…」

「あ、やめろ、やめろおお!!」

次々とつきつけられて行く事実、それは純粋なアリーシヤを汚すの
には十分だった…

「あ、ああ…あああ!うわああああ!!」

アリーシヤの心から生まれた穢れがその体を蝕んでいく。
すると、そこに小さな黒い光が姿を表した。

そして、その光からは今までアリーシヤが聞いていたのと同じ声が
響いたてくる。

「そうだ。怒り、憎しみ、悲しみ、それは穢れとなり人の心を蝕む。だ
が、それでいい…」

その黒い光はアリーシヤの中へと入っはいつていく

「お前の穢れは私が食らってやろう。故にお前は…」

「う、うっ…」

「私の器となるのだ…」

「はあ、はあ…」

ゆっくりと目を開くアリーシヤ。

その瞳は深い紅に変わっている…

「う、うう、うわああああああ!!」

その日、その屋敷からは謎の瘴気が広がり、周りにいた兵士たちは絶命していたのだという。

ただ一人無事だったのは、その時何があつたのかを全て忘れてしまっていたアリーシヤただひとりだった。その時、アリーシヤの体からは穢れが一切見当たらなかったとその街の守護天族は語っている…

テイルズオブゼスティリア2

三人の騎士

「……………」

ハイランド王国に隣接する森の中

一匹のボアが餌を食べているようだ。

その様子を三人の人が見つめていた。

長い金髪の手ドボウガンを腕につけた男、ウエーブのかかった栗色の髪をした杖を持つ女、そして、短く切った黒髪に片手剣を逆手に持った男…

彼らはそつと目配せをして準備をし…

「今だ!!」

一斉にボアに飛びかかった…

「……………」

三人は見事な連携で凶暴なボアを撃破する。

そして、金髪の男が、倒したボアの体を調べた…

そして、その背中にハイランド王国の紋章を象った焼き印を発見する

「間違いない。こいつが標的のボアだ。」

それを聞いた二人は嬉しそうにそれを見つめる

「つて、ことは!!」

「私達！騎士試験に合格です!!」

「やったああああ!!」

静かな森の中に嬉しそうな二人の声が響いた。

「やれやれ…」

金髪の青年は二人のもとへ戻る

「リーン、ルイス、二人共浮かれすぎだ。まだ試験は終わっていない…」

「おっと、そうだったなレイ」

リーンと呼ばれた青年は声をかけたレイにそう返した。

「このボアを持ってハイランドに帰らないと行けないんですね。」
ルイスと呼ばれた女性もそれに続く。

「ああ、まずはこのままレディレイクに向かうぞ。」

「おうー！」

レイの号令に合わせて三人はボアを抱えかて歩き始めた…

「……………」

スキットー騎士を目指してー

リーン「速く行こう！レディレイクまで行けばようやく俺もハイランドの騎士になれるんだ！」

レイ「嬉しそうだな」

リーン「当たり前だろ！ずっと夢見ていたハイランドの騎士になれるんだ！なあ、ルイス！」

ルイス「はい、夢が叶うと思うととっても嬉しいです！」

レイ「ふ、みんな気持ちは同じか」

リーン「だろ！だからさ、速くレディレイクに戻ろう！」

レイ「待て、戦闘直後なんだから無理をすると体を壊すぞ…行ってしまうか」

ルイス「相変わらずですねリーンさんは…」

レイ「ああ、あの騎士に対する並々ならぬこだわりは俺達も見習わないといけないな」

「……………」

意気揚々と魔物を抱えたまま森をくぐり抜けていく。

彼らの目には澄み渡る森の姿がはつきりと見えていた。

そう、少し前までは普通の人間には見ることでできなかった”穢れ”も含めてだ。おかげで彼らは穢れをまとった魔物、豹魔をかわしながら進むことができている。大きな猪の魔物を抱えたままでも比較的安全に道を進むことができていた…

「この調子なら時間までには余裕でレディレイクに着きそうだな」

と、レイの言うとおり危険な豹魔を回避してきたおかげでここまでは順調そのものだった。

「終わったら少しだけみんなでご飯でも食べに行きましょうか」

と、ルイスは上機嫌になっている。レイもそれに満更でもなさそうな笑顔で返すがただ一人、リーンはそれをはつきりと断った。

「ごめん、俺、騎士になったら先に行きたい場所があるんだ…」
首から下げている綺麗な黒曜石のネックレスを見つめた。
「そうか、まずはその人に報告しないといけないもんな」

「きやああああつ!!」

三人が談笑をしているとき、突如、女性の悲鳴が森の中に響いた。
「女の人の声!?!」

「行ってみよう!」

その声に反応し三人が走ってみるとそのには荷台を引いた馬車から転げ落ちた一人の女性とムカデ型の大型憑魔、オオムカデがいた。
馬車から落ちて身動きが取れない女性にオオムカデは口から毒針を3本発射する。

もうダメだと女性はきつく目を閉じた。

カキインカキイン!!

その時、どこからか飛んできた矢が毒針の内2本を撃ち落とした。

そして…

ゴゴゴゴ!!

地面から女性の前に石の槍が飛び出し、毒針から女性を守る。

ギシャアアアアツ!!

すると、ムカデは女性に向かって這い出し、襲いかかろうと突っ込み始める。だが、それを…

「はあああああつ!!」

ズバアアン!!

長い片手剣を逆手に持ったリーンが女性の前に飛び出して剣で迎撃、その顔にダメージを与えオオムカデを後退させた。

それに伴いレイとルイスもリーンに並び立つ

「みんな!行くぞ!!」

リーンの掛け声と同時に体制を整えたオオムカデとの戦いが始まった…

—————Z—————

「みんな!行くぞ!!」

剣を持ってムカデに向かってリーンが走りだすと同時にルイスが詠唱を開始、そしてレイが矢をムカデに向かって撃ち出す。

バシユン！バシユン！

レイの矢はムカデに向かってまっすぐに飛んでいきオオムカデを大きくのけぞらせる。

ムカデがひるんでいる間に走っていたリーンは攻撃態勢に入っていた。

「幻影刃!!」

瞬時に敵の背後へ駆け抜け抜けすれ違い様に斬りつける。

そのまま一歩後退すると同時に詠唱を終えたルイスが術を発動させた。

「グレイブランス！」

地面から伸びた岩石の槍がオオムカデの体を貫いた。

堪らずフラフラとよろめくムカデにレイとリーンの駄目押しの一撃が襲いかかった。

「荒鷹！」

「輪舞旋風！」

リーンの鋭い回し蹴りにより体制を崩した魔物をレイの放った神速の矢が貫き、オオムカデは倒れ伏して動かなくなった。

「今日もバツチリ決まったな！」

「なに、訓練通りにやれば当然の結果だ。」

「でも、私達三人が力を合わせれば敵はなし！って感じですよね！」

—————

魔物が動かなくなったのを確認すると三人は武器をしまった。

すぐにレイは後ろの女性に手を貸す

「大丈夫ですか？」

「はい、ありがとうございますー！」

レイの手を取り女性は立ち上がった。

女性は胸に特徴的な羽の形のバッジをつけていた。どうやら今巷で話題の商人ギルド、”セキレイの羽”のメンバーらしい。

「どうして。護衛も付けずにこんなところまで来ていたんですか？」

と、気になったリーオンが尋ねたところで「おーい！シズク〜！」という声がした。おくから赤いシヨートヘアの女性が現れた。その人を見て商人の女性は声を上げる

「り、リーダー！」

見ればその胸には同じバッジをつけている。そして、その腰の後ろには2本の短剣、どうやら、このリーダーと呼ばれた女性が護衛も兼ねているようだ。

「一人で勝手に行くなどあれほど行っただろ。馬車は徒歩とは違っていざという時に小回りが利かないんだからさ…」

「ごめんなさい。」

それだけ言うとりーダーと呼ばれた女性は三人の方へ振り返った。

「あんたたちが助けてくれたんだね。助かったよ」

「いえ、騎士として当然のことをしたまです。」

「騎士？」

そして、三人を見たあと運んでいたボアをみて納得したように頷いた。

「そっか、候補生の…まあ、何はともあれ助かったよ。」

そう言うとき女性を促して馬車に乗り込んだ。

「あんたらレディレイクに行くんだろ？ついたら一度商店に寄って行ってくれよ！この礼はきっちりさせてもらおうよ！」

陽気にそう言うとき手綱を握って走って行ってしまった。

その様子を見送る三人。しかし、ここでレイがあることに気づいた。

「まずいぞ！時間が！」

「あっ!!」

そう、悲鳴を聞いて遠回りをしてしまった上に勝てたとはいえず強い憑魔との戦闘、余裕のあった時間はいつの間にか迫ってきていた

「ヤバイぞ！急げ!!」

三人はボアを抱えて慌ててレディレイクへとはしっていった。

続く